# 上竹野遺跡出土の土偶

菅原哲文・長澤友明

## 1　調査の概要

上竹野（うわたけの）遺跡は大蔵村清水字上竹野に位置し、山形県内の最上地方を代表する弥生時代の遺跡として、学史的にも著名である。遺跡は、最上川に合流する銅山川左岸の段丘上に立地し、標高は約 70 mを測る（図１）。大正から昭和にかけて、当時大蔵村清水法含寺（後に新庄市接引寺）の住職である花車円瑞により遺物の採集が行われていた。また昭和 27 年（1952）に最上地歴学会、昭和 29 年（1954）に山形大学柏倉亮吉教授の指導のもと、山形大学と致道博物館による発掘調査が行われた。昭和 38 年（1963）には上竹野遺跡の弥生土器が県指定文化財となっている。『山形県史　考古資料』において、上竹野遺跡の主な弥生土器や石器類、石製品（独鈷石）、土偶、紡輪などの土製品が報告されている（柏倉ほか 1969）。周辺の遺跡として、南東隣に縄文時代中期後・末葉の上竹野２遺跡が、北東約 1 km 先には中期中葉から末葉を中心とした白須賀（しらすか）遺跡がある。

この度紹介する資料は、（公財）山形県埋蔵文化財センターの発掘調査によるものである。当センターでは、一般国道 458 号道路改良工事事業により最上総合支庁道路計画課から委託を受け、平成 27・28 年の２か年にわたり上竹野遺跡の発掘調査を実施した。その後、平成 29・30 年度にかけて整理・報告書作成作業を行う予定となった。

調査面積は平成 27 年度が 3,650 ㎡、平成 28 年が 1,469 ㎡である。発掘調査区は１～５区を設定した（図３・４）。主な検出遺構と遺物であるが、縄文時代では後期後葉の竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成される集落跡が確認された。その他、中期前葉・後期前葉と後葉・晩期末葉の土坑や柱穴などの遺構が検出されている。弥生時代であるが、前期から中期初めが主体であり、竪穴住居跡が６棟、捨て場５カ所、土坑、柱穴、集石遺構、土器埋設遺構（再葬墓）が確認されている。竪穴住居群は２区の北東と４区に集中して検出された。国道を挟んで東側の５区北端には土器埋設遺構や墓壙が集中しており墓域を形成する。捨て場は住居群と重複したり、その周囲に形成されている。出土遺物の総箱数は 209 箱である。なお、整理作業途中の事もあり、遺構の時期や遺物の認識についての正式な内容は、平成 31 年に刊行予定の報告書が優先する事を申し置きしておきたい。

## 2　出土した土偶

当遺跡では、弥生時代初めと考えられる土偶が出土し、そのうち２個体は意図的に埋納したと思われる出土状態を呈していた。土偶は４個体出土している（図５）。１は、頭部を欠く刺突文土偶と考えられる。残存高は 15.3cm、幅 17.6cm、厚さ 5.6cm である。中空である。股下には穿孔があり、内部の空洞部に続いている。表側の文様であるが、粘土粒貼り付けにより、胸、臍状の表現が見られる。両肩の上に瘤状の貼り付けがある。体部中央に縦の沈線が一本入る。肩部には肩パット状に隆帯を貼り付け、その上に細かく刺突を施す。刺突は部分的に半円状の形状になるものがある。腰の部分には、隆帯により帯状の貼り付けが一周めぐるが表側は剥落している。裏側は黒色を呈し、上部に平行沈線文を上下に２条ずつ配し、中心を一カ所縦沈線でつなぐ。背中の中央には６字状の沈線文が入る。表と同様に肩部にパット状の

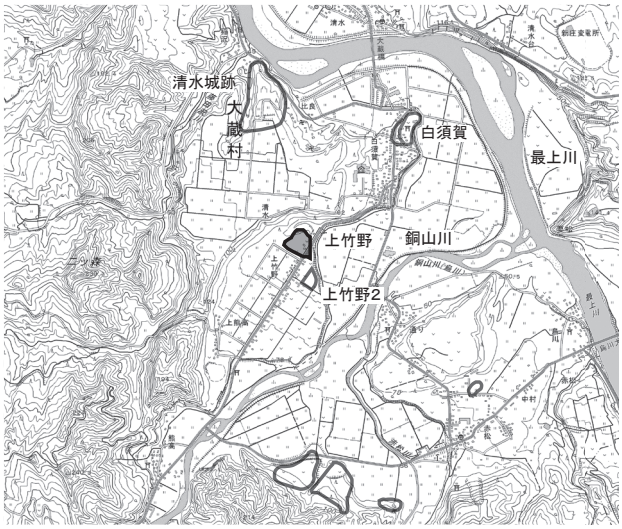



図１　上竹野遺跡位置図（S=1:50,000）

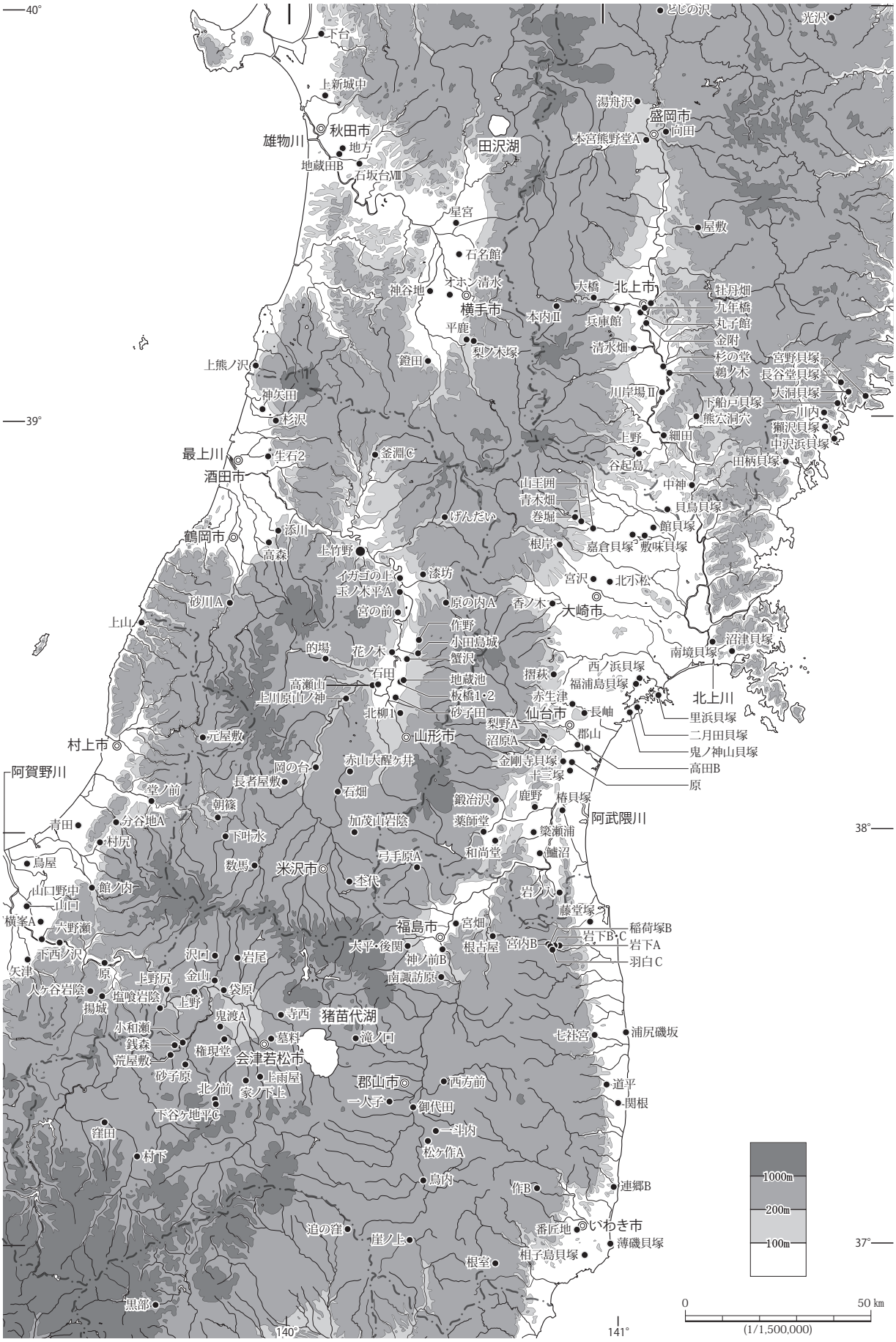



図２　東北中部・南部における縄文時代晩期後半から弥生時代前期の主要遺跡

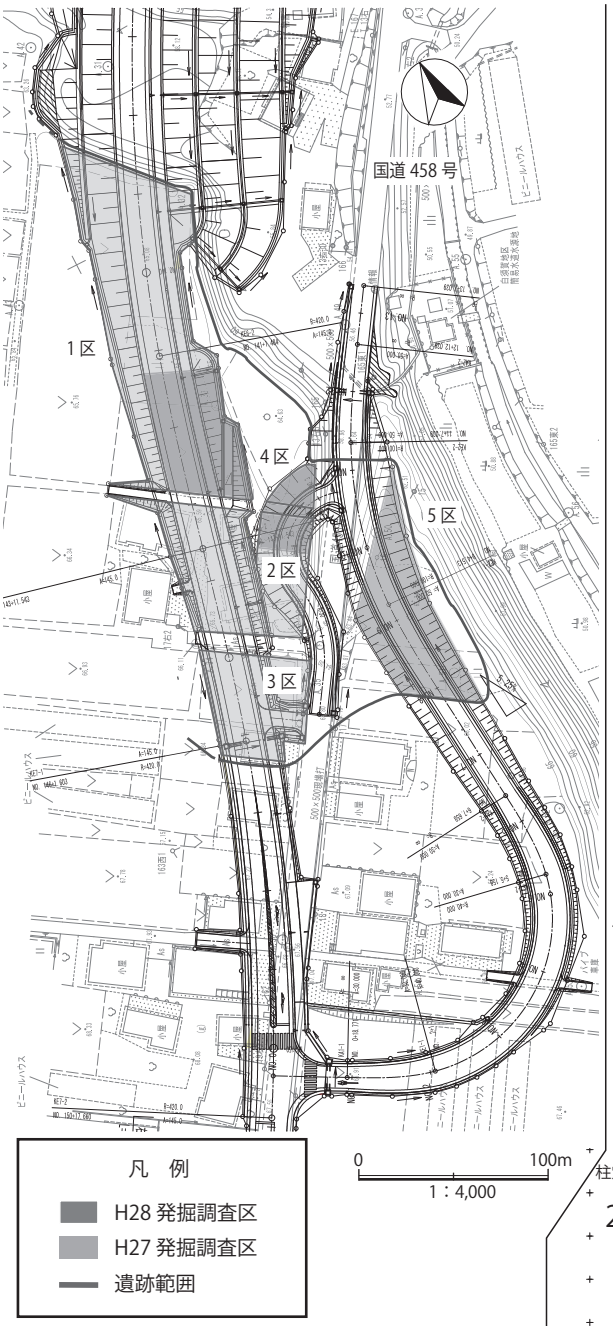



図３　上竹野遺跡調査区概要図

凡例 ( 弥生時代 )

- 竪穴住居跡
- 捨て場
- 土坑
- ○ 土偶出土地点

図４　上竹野遺跡遺構配置図

隆帯が貼り付けられ、上に刺突が施される。全体に赤彩が認められる。

２は、頭部と体部下半が欠ける刺突文土偶である。全体に刺突が施され、中空である。肩の部分に粘土を貼り付けパット状に隆起させ沈線を沿わせる。上も刺突で埋められている。表面には粘土粒貼り付けにより胸と臍状の表現があり、体部の中心に沈線が１本通る。裏面は、背面の上部に２本の平行沈線文を施し、そこから垂下する６字状の沈線文が見られる。体部の両脇にそれぞれ弧線文が入る。表・裏面に赤彩が残る。体部内面には、幅約２cmほどの輪積み痕が確認される。体部下の割れ口は摩耗している。

３は土偶の足である。大きさは53×35mm、残存高は13mmである。足を作り脚部と接合したが、接合部から剥落したと思われる。足先はキザミにより指を形成している。

４は土偶の足である。大きさは50×46mm、残存高は18mmである。足首の箇所に沈線文がめぐる。円盤状の足を作った上に粘土を輪積みして成形していったが、足首部分で剥がれ破損している。沈線内や脚の一部には赤彩が残る。また黒色の付着物も見られる。

出土遺構と状況について述べる。１は３区のSF60捨て場の底面近くから仰向けに水平な状態で出土した（図６上・写真１）。捨て場の土層であるが、F1層は黒色～黒褐色シルトで厚さ約30cm、土器などの遺物が大量に廃棄されていた。F1層は褐色粗砂が主で黒色シルトが少量入り層厚約10cmである。土偶（RP158）は包含層の検出面から約60cmの深さで出土し、F3層とした黒色シルトが主で地山由来の褐色砂混じりシルトが混じる層より水平な状態で出土し、その近くからは黒色で口縁部を欠く小型壺（図６－１）が出土している。土偶下のF4層は、黄褐色粗砂層で無遺物層である。捨て場自体は、南北4.4 m、東西2.8 mの広がりをもつが、土偶が出土した捨て場の底面近くは、長さ170cm、幅120cmの楕円形の土坑状に落ち込んでいた（写真２）。また出土した弥生土器は（写真３）、復元すると他の捨て場より残存率が高い。土偶は、頭部や腰の貼り付け文の一部を欠いている他は破損している状況は見られなかった。土偶と同じF3層で同じレベルから出土した土器を図６右下に示した。１は壺で頸部と体部の境に一本の沈線が入る。２は、１と同位置から破片が出土した。浅鉢で、平行沈線文間に抉りを入れ、抉りの両端に粘土を盛り上げて瘤状にしている。

土偶２はSK310土坑から出土した（写真４）。SK310は長軸68cm、短軸54cm、深さ40cmで、覆土は２層に分かれる（図６左下）。F1層は黒褐色砂質シルト層、F2層は黒色砂混じりシルト層であるが、層の内容が類似し、南側の土層の境界がはっきりしなかった。土坑内に扁平な直径約25cmほどの礫が斜位に入っており、土偶は若干の間層を挟んで、その礫の上に乗った状態で出土している。単なる廃棄では、礫の中央に乗った状態にはならないと思われ、意図的な埋納の可能性があると考えたい。

３・４が出土したのは、１区の南側に分布する弥生時代を中心とするSF136包含層である（図４）。包含層は、東西約20 m、南北23 mほどの広がりをもち、１区東側の調査区外へと広がる。厚いところで約35cmの黒褐色シルトを基調とする層で、F1a・ｂ、F2層に分層している。F1a層は弥生時代中期中葉の遺物が含まれる。F1b層は弥生時代前期から中期初めの遺物が出土する。土偶３・４は、３がF1b層でも下層、４は取り上げ時に細別層を表記していないが、F1b層の下層と把握される。ただ、少量ながら縄文晩期や後期の遺物も混入しているため注意を要する。なお、３・４の土偶は廃棄された物と思われる。

図５－５・写真９は、上竹野遺跡出土として『山形県史　考古資料』に写真が掲載されている土偶頭部である（柏倉ほか1969）。発掘調査の出土ではなく採集品である[1)]。刺突文土偶の頭部であり、残存長7.7cm、幅6.5cm、厚さ5.9cmである。土偶１よりもサイズは大きくなり別個体である。頭髪は上に張り出し二股の板状となり、中央に一つ貫通する孔がある。刺突が充填される。眉、鼻、目は隆帯を貼り付け表現され、眉と鼻に刻み目が入る。右側頬には入墨を思わせるような４本の沈線と、貫通する孔がある。左頬と鼻の一部は欠ける。裏面には縄文施文後に全体に刺突を施している。首は円筒状の中空で、輪積み成形と考えられる。首の上に円盤状の粘土塊を貼り付け、顔面は粘土板を斜位に貼り付けて形成している。刺突や沈線内には赤彩が残る。

土偶の時期的な位置づけであるが、１は同一層内の土

器から判断すると大洞A´式の新しい時期・砂沢式期と考えられる。この土偶に類似するものの一つとして、宮城県大崎市北小松遺跡のC丘陵南斜面a包含層Ⅰ層出土の刺突文土偶がある（図12）。背面の沈線文様はよく類似している[2)]。当期の土偶に関して金子昭彦氏は、東北地方北部の弥生時代土偶の編年を考察されている（金子2015）。2の土偶は砂沢式古期とされた青森県無沢遺跡や大曲遺跡の刺突文土偶に文様が類似し、磨消手法が見られない事から同時期に位置づけられるものと推測される。また、足先だけの3・4については晩期末から弥生時代初めにかけての時期として捉えておきたい。5の頭部は2とほぼ同時期と推測される。

## 3　県内出土の晩期末から弥生時代の土偶

晩期末から弥生時代にかけての県内では、いわゆる「結髪土偶」や「刺突文土偶」が分布する。山形県内の当該時期の土偶については、会田容弘氏が集成を行い、東北地方の結髪土偶と刺突文土偶との対比を行っている（会田1979）。大洞A´式期前後に認められ、髪を結んでいるような表現が見られる結髪土偶と、頭髪部に冠状の突起や、肩部にパット状の隆起が付され、体部に刺突を埋め尽くす刺突文土偶の認定条件を提起し、山形県内を含めた東北地方に分布することを確認している。氏の論考から30年以上が経過するが、その後の事例はあまり増えてはいない。

また岩崎義信氏は縄文早期から晩期の県内土偶の変遷をまとめている（岩崎2009）。小林圭一氏は縄文後期から晩期にかけての土偶について県内資料と東北地方地方の資料を含め、特徴と変遷を解説している（小林2015）。

県内で出土している縄文時代晩期末から弥生時代にかけての土偶を図7・9～11、写真10に集成した。

図7は、遊佐町杉沢遺跡出土の土偶である。晩期中葉の資料となるが、出土状況に関連してここに取り上げておく。大洞C2式期で結髪土偶になる前段階である。遮光器の目が退化して横長の隆帯貼り付けによる表現であり、体部には磨消縄文による雲形文が施される。頭部には一対の角状に張り出す突起がある。

当土偶は遺構内に埋納された土偶の事例としてよく知られている。昭和27年に工事の際に発見され、酒井忠純氏により現地の調査と発見者への聴取が行われ、出土状況が報告されている（江坂・酒井1954、江坂1960）。報告では、土坑内に川原石を方形に囲った石囲の中に、頭を北北西に向けて仰臥した状態で埋納され、その上に長径30cmの蓋石が被せられていたという（図7右）。

図9－6は、大石田町イカゴの上遺跡出土の中空土偶である（石井1997）。結髪土偶で頭部に三角形状に頭髪部分が張り出し沈線文が入る。粘土粒貼り付けにより胸が表現される。体部上には平行沈線文、表面には中心線と縦の波状沈線が入る。股の部分は三角状に沈線区画され刺突が入る。大洞A2式に位置づけられている[3)]。

図9－7は、天童市砂子田（すなごだ）遺跡出土の土偶である。頭部のみが残存する。報告によれば、A区北側の土器捨て場からの出土で、砂子田3群土器に伴うものとされる（森谷・黒坂2003）。大洞A2式に併行する時期と考えられる[4)]。頭頂部の左右両端の頭髪部に円柱状の突起が付く。先端には円文が6・7単位施される。側面には連続して細い沈線が入る。頭頂部には棒状工具による刺突が1か所ある。目の周囲には縦に連続して短い沈線が入る。

図9－8は、寒河江市高瀬山遺跡HO地区出土である。頭部から体部上が残存し、両端が丸く張り出す。結髪部と背面に円形刺突が施される。目と口は沈線による表現である。報告によると、11区の遺物包含層出土で、包含層は後期の宝ヶ峯式と、大洞A2式土器が若干出土し、当期の土坑が検出されている事から、A2式に位置づけられるとしている（小林2005）。

図10－9・10は最上町げんだい遺跡出土の土偶である。いずれもA区出土で、縄文時代後期末～晩期、弥生時代前期の遺構や遺物が確認されている（安部・月山1988）。9は土偶下半部で両脚を大きく開く形態である。表面の体部には沈線による弧線文があり、体部下を沈線で区画し、その下を刺突で充填している。10は頭部である。隆帯貼り付けにより眉と鼻が表現され、目と口、鼻の穴が陰刻により表現される。眉の上は縦に連続して刻みが入る。岩崎は砂子田遺跡と同様な特徴の頭部と評しており（岩崎2009）、土偶頭髪部の両端は張りだして図9－7・8のような形態になるものであろう。

図10－11は鶴岡市（旧羽黒町）高森遺跡から出土した結髪土偶の頭部である（酒井1991）。遺跡は縄文後期中葉・後葉、晩期にわたる時期である（小林2001）。高さ6.5cm、右の結髪と頬の一部、耳と鼻先が欠けている。眉、目は隆帯を貼り付け、上に縦位の刻みを施す。口は横の沈線の周囲に縦位の刻みや刺突を施す。頭髪の流れも沈線によって写実的に表現されている。中空土偶と思われる。秋田県湯沢市鐙田（あぶみでん）遺跡で、類似する写実的な頭部が表現された結髪土偶がある（湯沢市教育委員会1974）。高森遺跡の資料は頭部のみであるが、大洞A´式期の範疇て捉えられるものと推測される。

図10－12は、真室川町釜淵C遺跡出土とされる土偶である。『真室川町史』（大友1969）によると、大正4年（1915）に五郎前の田を耕作中に地下60cmの深さから出土したとされ、現在は町内の正源寺が所蔵している。『神室山・加無山』（柏倉ほか1978）では、この土偶が出土した遺跡を釜淵D遺跡としているが、C・D遺跡付近の遺跡名を県遺跡地図登載以前に「五郎前遺跡」と称したところからの錯綜があるとされ、その後の文献では出土遺跡は釜淵C遺跡内として扱われている（黒坂2003）。昭和43年に国指定重要文化財となっている。報告では内部は中空で大洞A´式期の土偶として紹介されている（柏倉ほか1978）。頭髪部はアーチ状となり頭部との間に空間がある。目・眉・口は隆帯を貼り付け刻み目を施す。胸や臍は粘土粒を貼り付け、胸から肩にかけては隆帯が貼り付けられる。両側の脇腹には沈線による工字文状の文様が入る。腰部分は上下を沈線で区画され内部は刺突文が充填される。背面は、頭部と腰に匹字文、肩部に水平の沈線に短沈線を沿わせる。背中には6字状と、対称な弧状文が入る。

図10－13、図11－14・15は、寒河江市石田遺跡出土の土偶である（会田1979）。遺跡は本格的な発掘調査は行われていないが、大正15年（1921）の鉄道敷設工事の際に遺跡東側から縄文時代や弥生時代の遺物が出土し、土偶などもその際に出土した。昭和44年（1969）の工場拡張工事の際にも大量の遺物が出土し、山形大学教育学部歴史学研究会考古学班と寒河江高校により遺物の採集や一部の発掘が行われている。この東側のB地点では大洞B式～C 1式期の土器が出土している。昭和55年の宅地造成工事の際に大型の弥生土器が2個体出土し試掘調査が行われた。この西側のA地点で、1号土壙と2号土壙には深鉢や壺が埋設されており再葬墓として報告されている（宇野1994）。

図10－13は結髪土偶であり、胸から肩にかけて粘土貼り付けによる隆帯文が入る。体部中央には垂下する沈線と、頭部や体部には平行沈線文、腰は刺突が充填される。背面には円形の刺突文が並ぶ。

図11－14は土偶上半部である。胸は細長い隆帯が貼り付けられて表現されている。文様は表面に平行沈線文、裏面の体部上半に円形刺突文列が施される。

図11－15は頭部下から体部上半部が残存する。会田氏によれば頭頂部に平坦面があるので結髪土偶であり、中心に心棒状の物があったものと推定している。首には平行沈線文と列点文があり、表面には胸から肩へ伸びる隆帯貼り付けがある。背面には平行沈線文が入り、表と裏に6字状の沈線文がある。

図11－16は鶴岡市（旧藤島町）添川遺跡出土の土偶である[5]。頭部の状況から結髪であるとされる（会田1979）。胸は粘土粒貼り付けによって表現され、体部表面には弧線文が施される。

土偶17（写真10）は、河北町花ノ木遺跡出土の土偶である。山形大学や河北町教育委員会の発掘調査によって、縄文時代晩期末から弥生時代にかけての遺跡として知られている。晩期末と思われる竪穴住居跡や土壙、墓壙群の検出や出土遺物が報告されている（今田2001、高橋2011）。土偶は平成8年の試掘調査出土である。高さ10.1cm、頭部を欠損し胴体が2つに割れて出土した。山形県立博物館の土偶企画展図録でも紹介されている（押切・佐藤2010）。表面は、首下にネックレス状の刺突列があり、肩から胸にかけて隆帯が貼り付けられる。腰は上下を区画して沈線文が施され、三角形状の区画内は刺突が充填される。裏面は、体部上に円形状の貼り付け？が見られ、中央には6字状の沈線が入る。体部下の沈線区画内に刺突が充填される。類似する資料として岩手県北上市金附遺跡の土偶がある（金子・高木2006）。報告書第408図98の結髪土偶は、首のネックレス状の刺突列、胸から肩にかけての隆帯文、背面の円形貼り付け文や6字状沈線文が類似している。金子氏は大洞A´式古期に位置づけている（金子2002）。

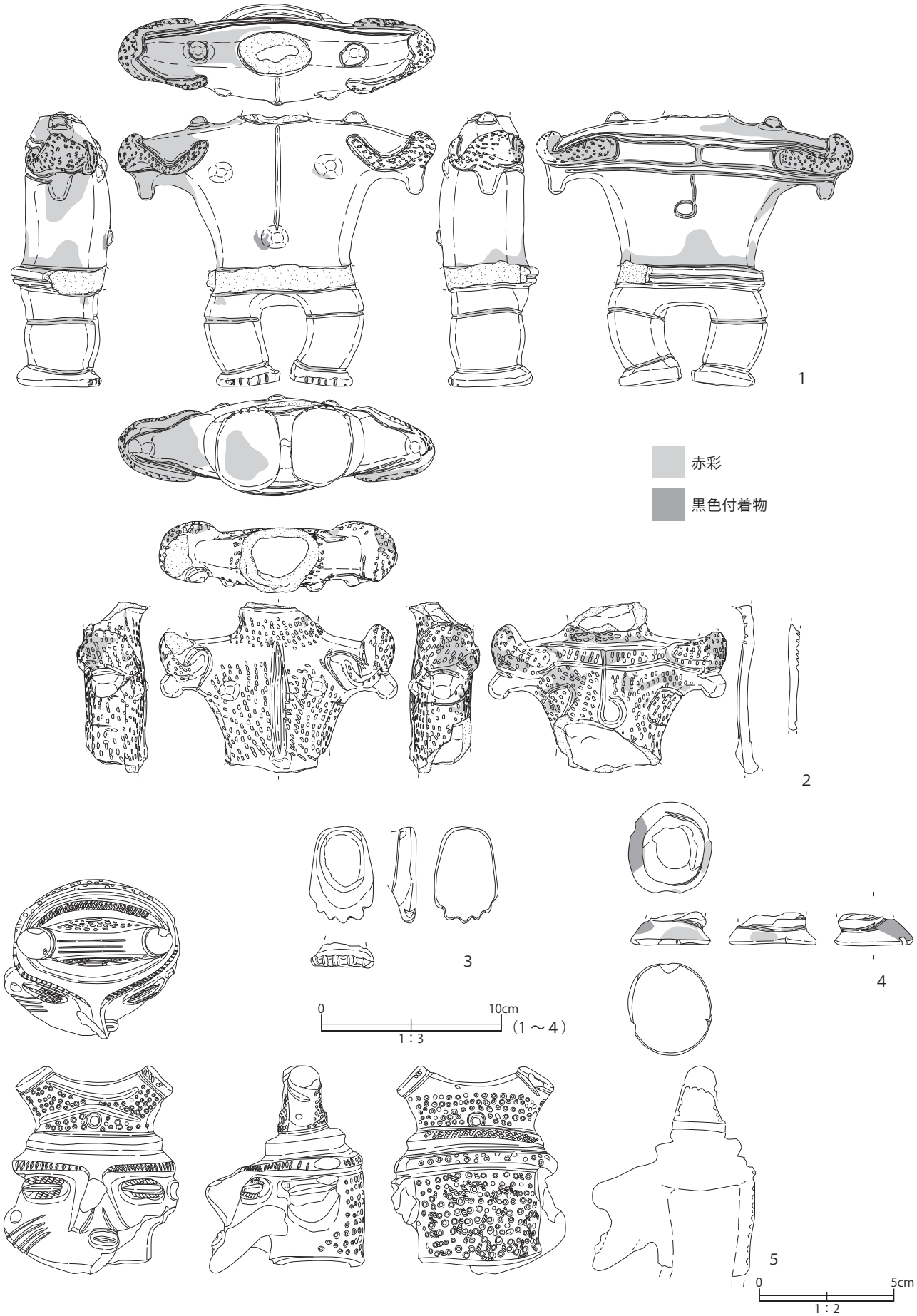
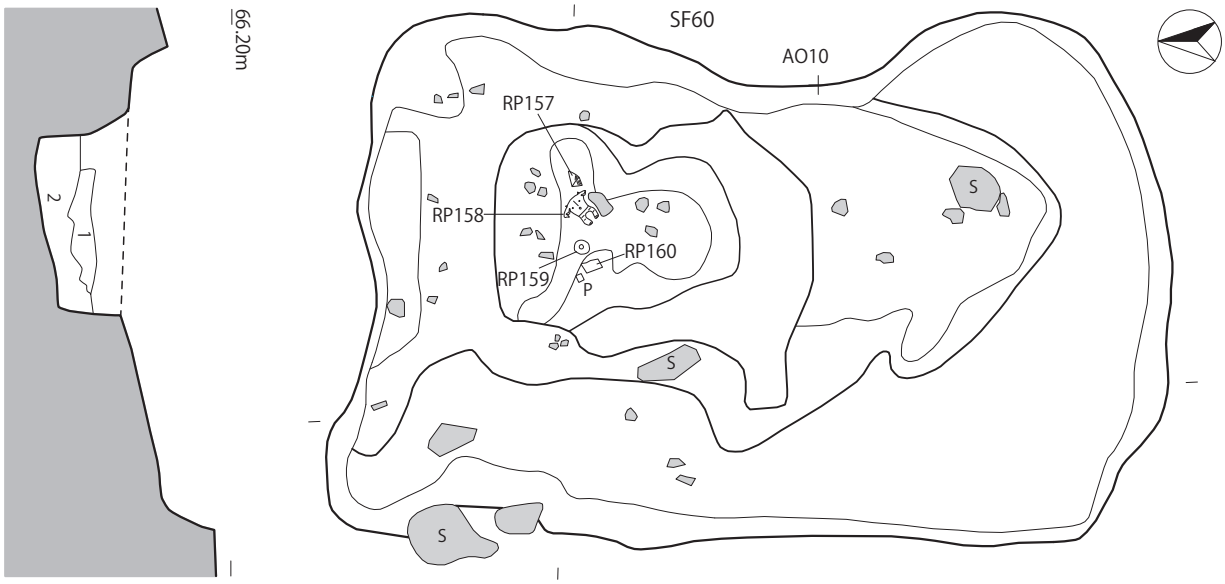
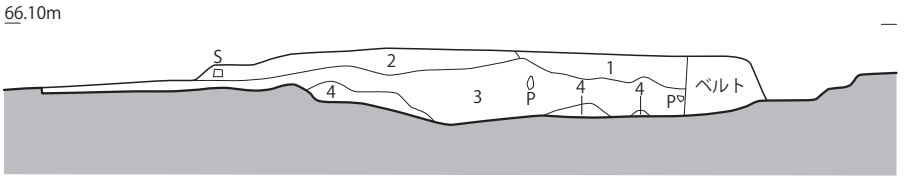



図５　上竹野遺跡出土土偶（１～４：山形県埋蔵文化財センター・５：新庄ふるさと歴史センター）

表１　上竹野遺跡土偶観察表

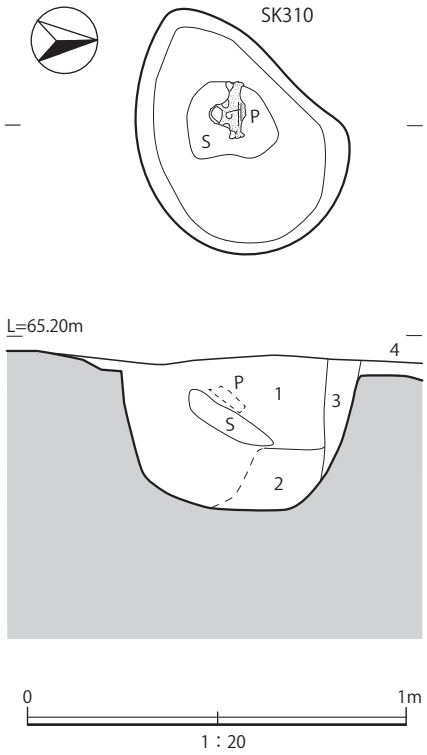
| 番号 | 出土地点 | 残存部位 | 計測値（mm） | | | 文様・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | |
| 1 | 3 区 SF60-F3 層・RP158 | 頭部を欠く以外はほぼ完形 | [153] | 176 | 56 | 肩パット状の隆帯・腰に隆沈線文・平行沈線文・「６」字状沈線文・刺突文・中空・両面に赤彩あり |
| 2 | 1 区 SK310F1 | 体部 | [95] | 133 | 40 | 肩パット状の隆帯・「６」字状沈線文・平行沈線文・弧状沈線文・刺突文・中空・両面に部分的に赤彩あり |
| 3 | 1 区 SF136F1b 層④ベルト BF13 | 足の先端のみ残る | 54 | 31 | [14] | 無文 |
| 4 | 1 区 SF136 下層 BG15・RP538 | 足の先端のみ残る | 51 | 47 | [17] | 沈線文・赤彩あり |
| 5 | 採集品 | 頭部 | [77] | [65] | [59] | 頭髪が二股の突起状となる・沈線文・刻目・刺突文・貫通穴・中空・LR? 縄文・全体に赤彩あり |




0　2m
1：40

※南北断面図の１～３は F1 層、４は F2 層に対応する。
東西断面図の１は F3 層、２は F4 層に対応する。



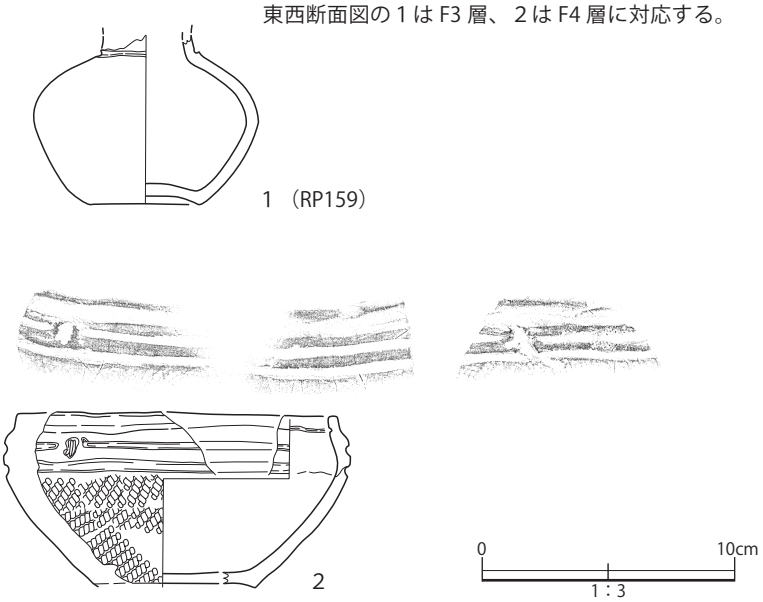




図６　３区 SF60 捨て場と出土遺物・１区 SK310 土坑

写真１　SF60 捨て場土偶出土状況（南西から）

写真２　SF60 捨て場完掘状況（南西から）

写真３　SF60 捨て場出土弥生土器

写真４　SK310 土偶出土状況（北西から）

写真５　土偶１（表）

写真６　土偶１（裏）

写真７　土偶２（表）

写真８　土偶２（裏）

写真９　土偶５（表・裏）
（新庄ふるさと歴史センター所蔵）

時期的な位置づけのまとめであるが、前述したように、６～８は大洞A2式期に位置づけられる。げんだい遺跡の９・10は残存部が少なく時期的な限定は難しいが、大洞A2～A´式の中で、高森遺跡の11は大洞A´式の中で把えられるものと思われる。

12は従来から大洞A´式期という見解がとられており、大洞A´式の古い時期に相当すると考えられる。石田遺跡の13も胸の表現などにより併行する時期と思われる。花ノ木遺跡の17も同様である。石田遺跡の14～16の土偶は、文様の省略化などから、13より後出の時期の可能性も推測される。

## ４　まとめ

当遺跡で確認された刺突文土偶であるが、１・２は砂沢式期に併行する時期と考えられ、５は砂沢式期から青木畑式期の範囲内に含まれるものと思われる。遺構に伴う資料であり、かつ１は共伴遺物による時期の特定が可能であることは重要である。

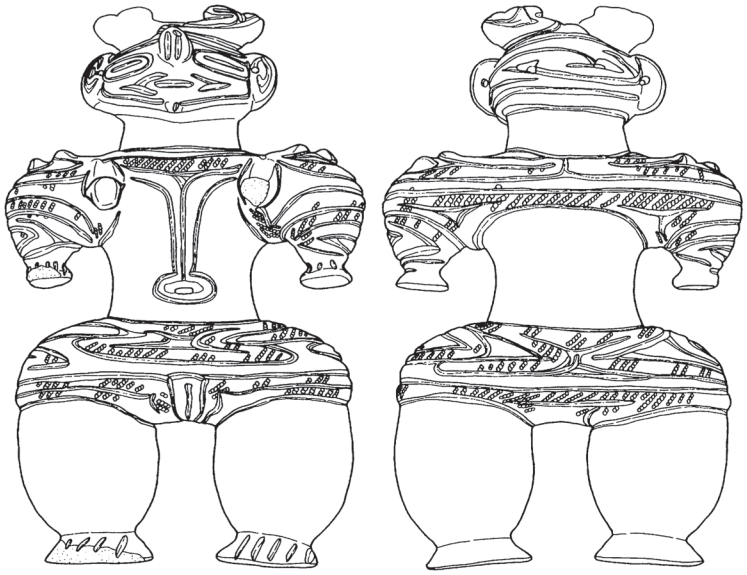
また土偶１・２は、出土状況から埋納された事例とみなされるものと考えられる。いずれも頭部が欠損した状態で出土しており、遺跡内の他の地点で同一個体の部位が出土していない。頭部が集落内の調査区外に廃棄や埋納されているのか、あるいは遺跡外に持ち出されているのか気になる所である。

埋納土偶の事例として、前述した杉沢遺跡の他に、秋田県能代市の杉沢台遺跡の事例をとりあげておきたい。当遺跡のSK53土坑内の底面から、頭部が外れた状態となったほぼ完形となる晩期大洞Ｃ２式期の土偶が出土している（図８：山崎・播摩2006、播磨・小林2008）。あらかじめ外した頭部の位置を置き換え、後頭部の穿孔部位が上面を向くように顔面をうつ伏せにしており、意図的な埋納と設置である事が指摘されている。

頭部欠損の埋納土偶については、当遺跡の事例に限らず、北秋田市藤株遺跡や伊勢堂岱遺跡でも確認されており、土偶の故意破壊行為が想定されている（播摩・小林2008）。

上竹野遺跡の土偶は県内の土偶祭祀の終末の事例として、また祭祀後の土偶の扱いを検討する上での良好な事例になるものと思われる。弥生時代まで存続する土偶の出土は、東北地方中・南部において縄文時代以来の生活の伝統残っている地域で局部的に製作されていたと考えられており（小林2015）、当遺跡もその範疇に入るものと理解される。県内の弥生時代前期の遺跡である日本海側の酒田市生石（おいし）２遺跡は、遠賀川系土器が土器組成の中に組み込まれているなど、西からの弥生文化の影響が大きいと思われるが、対照的に土偶は出土しておらず、縄文時代からの祭祀具の出土は希薄である。

最後に土偶の検討にあたり、小林圭一氏、金子昭彦氏、相原淳一氏から御指導・御助言をいただいた。新庄市ふるさと歴史センターからは遺物の資料調査で御協力いただいた。記して感謝申し上げたい。



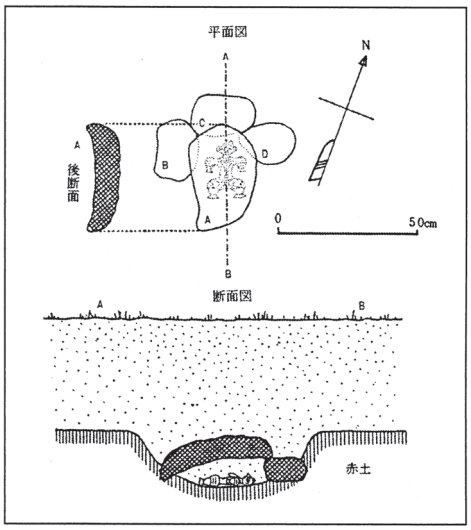
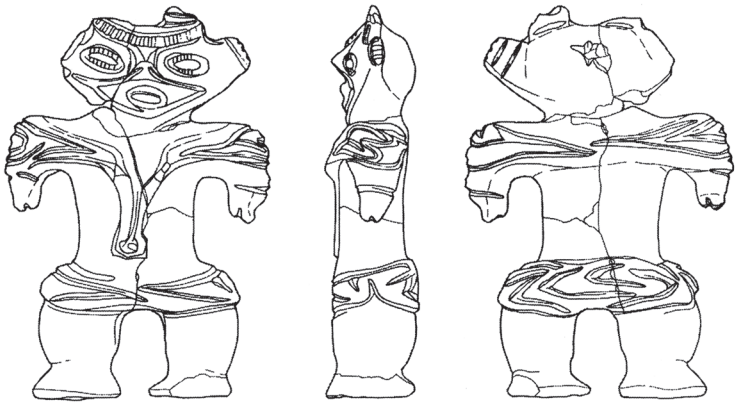



図７　遊佐町杉沢遺跡出土の土偶と遺構



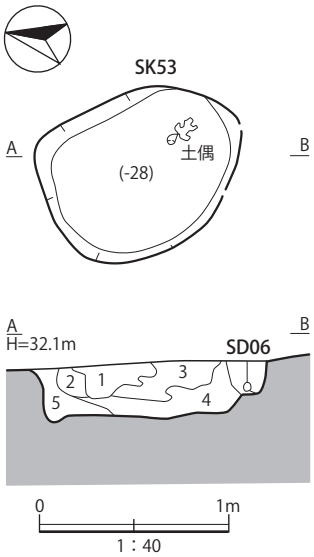
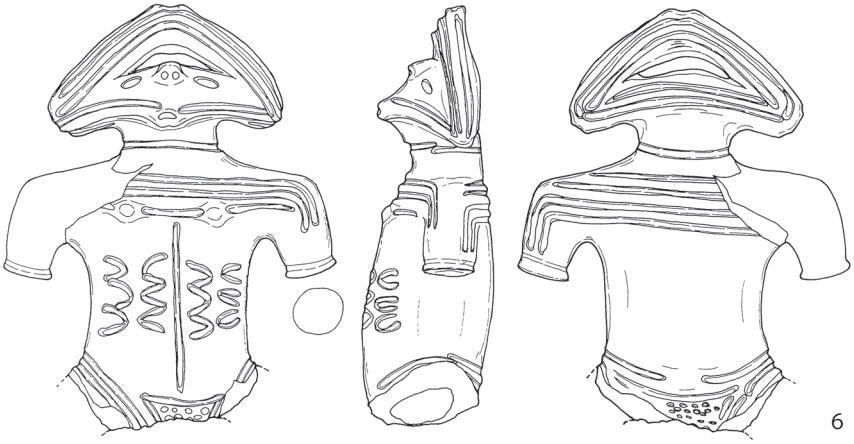
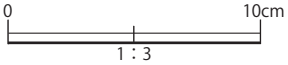


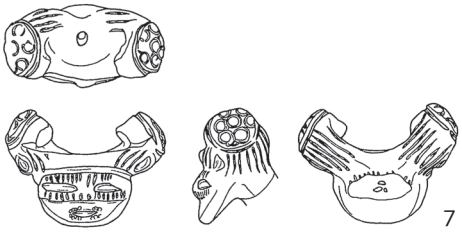

図８　秋田県能代市杉沢台遺跡出土の土偶と遺構



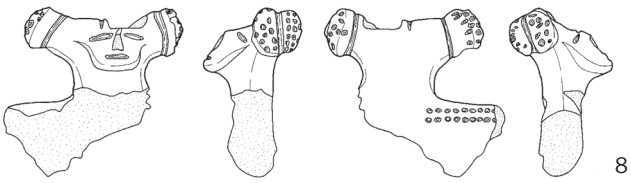
6

6：イカゴの上・7：砂子田
8：高瀬山遺跡 HO



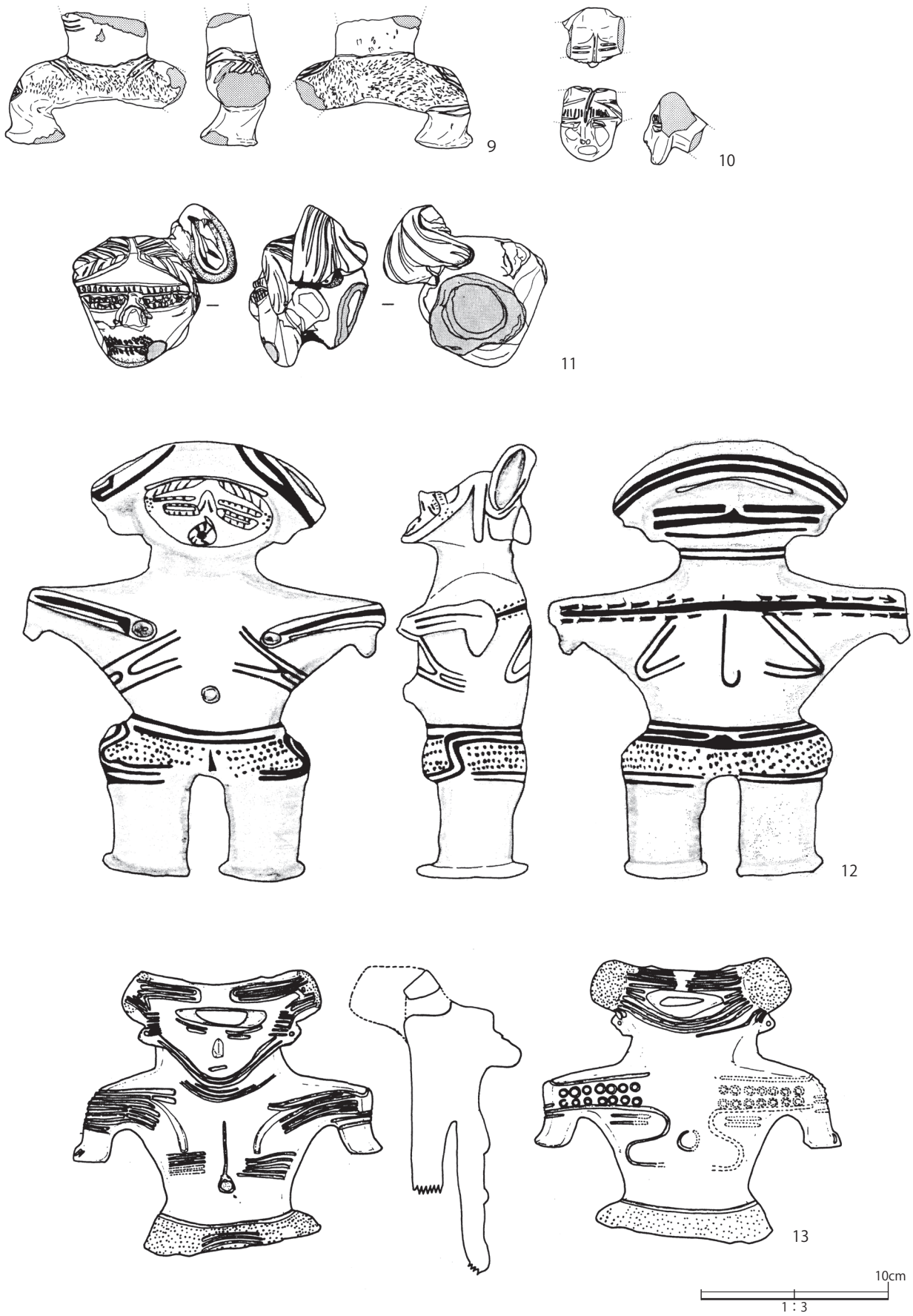



7



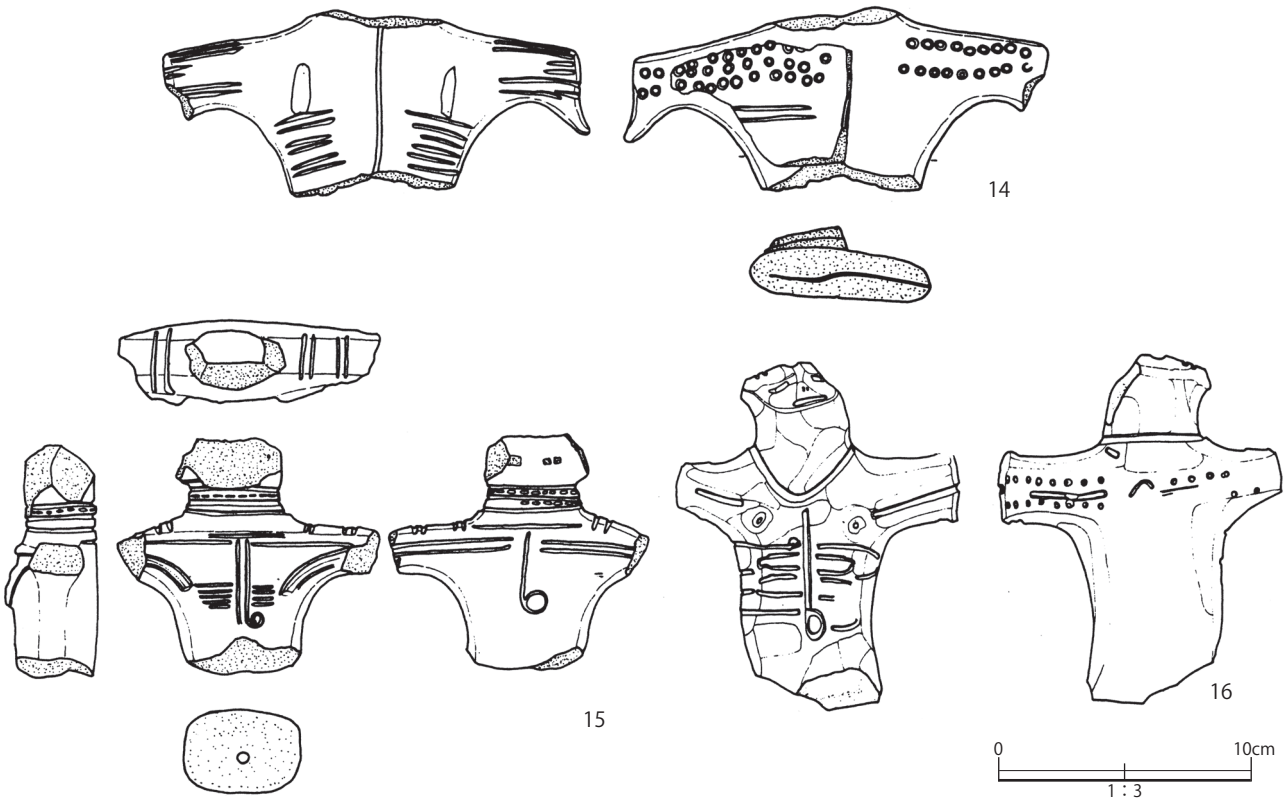
8

図９　山形県内出土の縄文時代晩期後葉～末葉の土偶




9、10：げんだい・11：高森・12：釜淵 C・13：石田

図 10　山形県内出土の縄文時代晩期後葉～末葉の土偶




14、15：石田・16：添川
図 11　山形県内出土の縄文時代晩期終末～弥生時代の土偶

写真 10（右・左）
花ノ木遺跡出土土偶

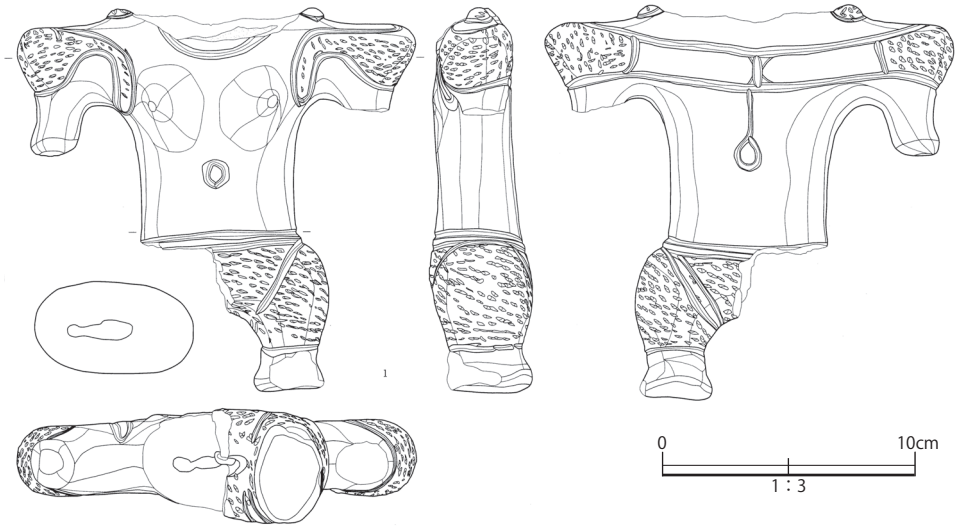



図 12　宮城県大崎市北小松遺跡出土の刺突文土偶

**註**

1）長澤正機氏により、当遺物は上竹野遺跡採集品として寄託された遺物の箱に含まれていた物であり、厳密に当遺跡出土とは断定できないため、伝上竹野遺跡出土と表記すべきものであるという指摘をいただいた。

2）相原淳一氏の御教示では、同一層内出土土器の内容から弥生時代初めの土偶と捉えても問題ないという事である。

3）小林圭一氏は、結髪土偶の出現を大洞 A2 式以降とし、当土偶については大洞 A2 式に位置づけている（小林 2015）。

4）砂子田３群土器について、報告書では大洞 A 式新段階から大洞 A ´ 式古段階の一時期として砂子田３式の呼称を提唱し、大洞 A 式→砂子田３式→大洞 A ´ 式の変遷としている。

5）添川遺跡は、現在の山形県の登録では A・B・C 遺跡に分けられている。小林圭一氏は、添川 B 遺跡出土として報告されている（小林 2001）。

**引用文献**

会田容弘 1979「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』第３巻２号 pp.27-43
安部実・月山隆弘 1988『げんだい遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 128 集
石井由佳 1997『分布調査報告書（８）』大石田町埋蔵文化財発掘調査報告書第８集
岩崎義信 2009『第 13 回企画展　土偶展』長井市古代の丘資料館
宇野修平 1994「第１章第５節　石田遺跡の発見と調査」『寒河江市史　上巻』pp.111-127
宇野修平 1994「第２章第１節　弥生時代の寒河江」『寒河江市史　上巻』pp.130-143
江坂輝弥・酒井忠純 1954「山形県飽海郡遊佐町杉沢発見の大洞 C2 式の土偶出土状況について」『考古学雑誌』39 －３
江坂輝弥 1960『土偶』校倉書房
大友義助 1969「第二章　郷土の石器時代」『真室川町史』pp.14-51　真室川町
押切智紀・佐藤正俊 2010『企画展　縄文のキセキ－半世紀の年を越えて－』山形県立博物館
小野章太郎 2014『北小松遺跡』宮城県文化財調査報告書第 234 集
柏倉亮吉ほか 1969『山形県史　資料篇 11　考古資料』山形県
柏倉亮吉・長澤正機・佐藤禎宏・加藤稔 1978「Ⅴ　神室山・加無山の考古　神室山・加無山周辺の先史時代遺跡分布」『神室山・加無山』pp.305-343　山形県総合学術調査会
金子昭彦・高木晃 2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 482 集
金子昭彦 2015「縄文土偶の終わり－東北地方北部・弥生時代土偶の編　年－」『考古学研究』第 62 巻第２号 pp.56-77
黒坂雅人 2003『釜淵 C 遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集
小林圭一 2001「最上川流域における縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第７巻１号 pp.21-81
小林圭一ほか 2005『高瀬山遺跡（HO 地区）発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 145 集
小林圭一 2015「第３部　縄文晩期の土偶たち」『「縄文の女神」と「遮光器土偶」』pp.10-13　山形県立博物館
今田史明 2001『花ノ木遺跡発掘調査報告書』河北町埋蔵文化財調査報告書第４集
酒井英一 1991「第二章　縄文文化と玉川遺跡」『羽黒町史上巻』羽黒町　pp.105-167
高橋郁夫 2011『花ノ木遺跡資料集』NPO 法人元気 net かほく・河北町教育委員会
播摩芳紀・小林克 2008「能代市杉沢台遺跡の土坑埋納土偶－遺体変形と土偶祭祀－」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第 22 号 pp.30-45
森谷昌央・黒坂弘美 2003『砂子田遺跡第２・３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 113 集
（公財）山形県埋蔵文化財センター 2016「上竹野遺跡」『年報平成 27 年度』pp.10-13
（公財）山形県埋蔵文化財センター 2017「上竹野遺跡（第２次）」『年報平成 28 年度』pp.10-13
山崎和夫・播摩芳紀 2006『杉沢台遺跡』能代市埋蔵文化財調査報告書第 17 集
湯沢市教育委員会 1974『鐙田遺跡発掘調査報告書』

**図版出典**

図１: 国土地理院の２万 5,000 分の１電子地形図「古口」・「舟形」を 50％に縮小し作成
図２：小林圭一氏作成の図面に加筆
図３・４：（公財）山形県埋蔵文化財センター 2017 より作成
図５－１～４：（公財）山形県埋蔵文化財センターの遺物を図化
図５－５：新庄ふるさと歴史センター所蔵の遺物を図化
図６：（公財）山形県埋蔵文化財センターの発掘調査遺構平面図・遺物より図化
図７（左）：（小林 2015）※原図は阿部明彦氏が作成
図７（右）：（江坂・酒井 1954）
図８（左）：（山崎・播摩 2006）
図８（右）：（山崎・播摩 2006）より再トレース
図９－６：（石井 1997）
図９－７：（森谷・黒坂 2003）
図９－８：（小林ほか 2005）
図 10 －９・10：（安部・月山 1988）
図 10 － 11：（酒井 1991）
図 10 － 12：（柏倉ほか 1969）
図 10 － 13、図 11 － 14 ～ 16：（会田 1979）
図 12：（小野 2014）
写真１～８：（公財）山形県埋蔵文化財センターより
写真９：新庄ふるさと歴史センター所蔵の遺物を撮影
写真 10（左）：（押切・佐藤 2010）
写真 10（右）：（今田 2001）